

第15章

支援事例



各年代の課題に対する支援事例を紹介します。

事例 1 幼児への支援

Aさん：自閉スペクトラム症、知的発達症、5歳
言葉での指示よりも、絵や写真で示す方が理解できる。
なくなったら終わり、おしまいボックスにいれたら終わりが分かる。
欲しいものは、写真や絵カードで要求することができる。

課題

- 給食を食べ終わるまでに1時間かかり、なかなか終わることができない。
- 家庭では、母親が1口ずつ食べさせないと食べないので、食事にとっても時間がかかっている。

取り組み

なぜ食べ終わるまでに時間がかかってしまうのか？

- どのお皿のものから食べていいのか分からない。
- 給食の終わりが分からない。
⇒ どれから食べたらいいのか、ワークシステムを活用。
空になったお皿は、おしまいボックスに入れる。
- 食べられないものがあるけど、どうしたらよいか分からない。
⇒ 食べられない食事は、「へらしてください」カードを先生に渡し、減らしてもらう。



経過

- 食事を食べ始めてから、食べ終わるまでの時間がとても短くなり、30分くらいで食べ終わることができるようになった。
- 家庭でもワークシステムを活用し、同様の取り組みを行ったところ、自発的に食べることができるようになった。



(システムを活用することにより、般化が助けられた)

事例2 中学生への支援

Bさん：自閉スペクトラム症、13歳

情報処理の困難さ、表出コミュニケーションの困難さ、社会性の困難さ、感覚の過敏さ

課題

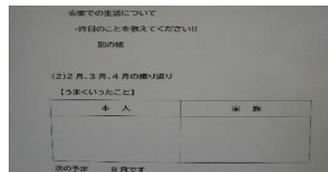
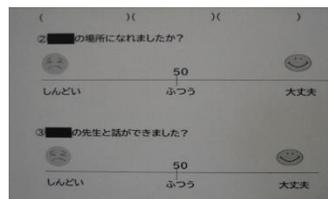
- 対人関係の不安感が強くなり、不登校の状態が続いていた。
- 自宅ではイラストを描く、ゲームをする等して過ごしていた。夜間の不眠や感情のコントロールができにくくなった。外出ができなかった。
- 話す人の声の大きさ、抑揚で不安が強くなる。たくさんの情報を伝えると混乱する。自分の気持ちを伝えることが苦手。聴覚の過敏さがある。

取り組み

- 医療機関を受診し、睡眠の安定を優先した。
- 刺激の少ない環境や見通しのある活動の中で成功体験を積むことができるよう放課後等デイサービスの利用を始めた。
- 保護者、教育機関、支援機関で話し合いの場をもち、今できていること、本人の強み、発達障害の特性についての共通理解と支援の方向性を検討した。

経過

- 視覚的に示してパターン化し、自分の思いを表出できるように取り組んでいる。
- 放課後等デイサービスでは、本人の好きなこと、得意なことから取り組むことで成功体験が増えた。
- 少しずつ登校できるようになり、学校へ行く時間が増えた。



事例3 高校生への支援

Cさん：自閉スペクトラム症、知的発達症、18歳
情報処理の困難さ、社会性の困難さ

課題

放課後等デイサービスにおける事例

- 来所後は靴下を脱ぎ（学校では履けている）、素足のまま室内用シューズを履いて活動してしまう。支援者からの「靴下を履きましょう」の介入や指摘に対して、拒否が多く、反発することもある。
- 靴下を履いて活動することは、学校卒業後も社会のルールとして必要なスキルである。
- 支援者の介入をどのようにしたら受け入れやすくなるかを考える。

取り組み

- Cさんへ靴下を履くことを促す。ただ促すのではなく活動スケジュールに文章にて示し、支援者が一緒に読み上げる（口頭だけの促しには反発する）。
- 否定的な表現でなく、肯定的な表現とした（Cさん自身が書いたような表現で）。「外出してから家に帰るまで靴下を履いておくことは、大人として良い行いです」

Aさんのスケジュール

令和0年0月0日 0曜日

※外出してから家に帰るまでは、靴下を履いておくことは、大人として良い行いです

- 検閲
- 本のひろば
- 工作
- 絵を描くひろば
- バランスボール
- チョイス
- スタンプ

おやつ時間は、活動中に追加になります。

経過

- 最初の頃は、文章を提示し、一緒に読み上げると、「いいえ」とは言うが、履き続ける様子も見られた。本人の調子によっては、「いいえ」と言わず、スムーズに受け入れることができた時もあった。
- 完全定着は難しく、ご褒美やトークンシステムを活用する方法も考えていく。
- 支援者は、どのような言い方（言い回し）なら、Cさんに指示を受け入れてもらえるか、分かるようになって良い。

事例4 大学生への支援

Dさん：自閉スペクトラム症、22歳

情報処理の困難さ、表出コミュニケーションの困難さ、
社会性の困難さ、関係理解の困難さ

課題

- ① 報告・連絡・相談のタイミングや必要性が分からないため勝手に作業を変更したり連絡なく大幅に遅刻したりする。
- ② 役割が明確でないチーム作業では質問等ができず周囲を歩いている。
- ③ 複数業務があると優先順位がつけられない。
- ④ 働くイメージを持てない（親や先生に言われて就職活動をしている）。

取り組み

- 講義形式で報告・連絡・相談のタイミングや必要性、電話の掛け方等を伝える。(①)
- 実際に本人が困る場面において、間を空けず、具体的に質問、相談の必要性を伝える。できそうなことはその場で実行してもらう。(①、②)
- 資料や手順書を用意し役割や見通しを視覚的に確認できるようにする。チーム作業でない業種にマッチングする。(②)
- 卒論発表に向けてゼミの日だけ大学に通っていたが、1週間前に状況を尋ねると焦ることなく「レジュメの手直しが残っている」との話がある。大学と連携しタスク整理で優先すべきことを視覚化。「印刷等もある。ゼミの日でなくてもレジュメ完成が最優先」と確認する（毎日通学し発表に間に合う）。(③)
- 本人の言葉を否定せず丁寧に聞くことでやってみたい事を把握。本人の能力で就業可能な職種をすり合わせ見学を複数行なう。その中から企業実習をする事となる。(④)

経過

- 実習先に真面目な働きぶりが評価され、雇用となる。一人で完結する作業を任されており、繁忙期には残業もある。
- 支援者に「忘年会は行かないといけないのか」という相談がある。「会社にもよるので、会社で相談できる人はいるか」と尋ねると「〇〇さんは話しやすいので大丈夫」と言う。支援者が確認すると、実際に担当者と関係が良好である。

事例 5 成人への支援

Eさん：自閉スペクトラム症、知的発達症、40代
 情報処理の困難さ、変化・変更の困難さ、時間・空間の整理統合の困難さ

課題

生活介護事業所における事例

- 休憩時間の過ごし方が分からず、会議室等の入ってはいけないところに入り大きな声を出したりする。
- 時々しか来ない利用者があると落ち着きがなくなり、イライラしたり、その人に向かっていこうとしたりする。
- 外出行事等、いつもと違う活動の時に興奮することがある。

取り組み

- 日頃から構造化された環境で活動できるように支援する（作業場所は、2方向のパーティションで刺激を抑制し、注目すべきところに注目がいきやすい環境を作り、スケジュール・ワークシステムで見通しや変化・変更を伝える）。
- 休憩時間もどこで過ごすのかをスケジュールで伝える。
- 気になる利用者がある（来る）かどうかを写真で伝える。
- 外出行事もスケジュールと行く場所や活動内容等を事前に視覚的に伝える。



経過

- 作業等の日中活動については、環境整備とスケジュール・ワークシステム等を使用することで、落ち着いて活動できるようになり、休憩時間もほぼ混乱なく過ごせるようになった。
- 特定の利用者の通所状況によって興奮することがなくなった。
- 外出行事やいつもと違う活動についても事前に視覚的に伝えることによって、穏やかに過ごせることが多くなった。
- 今後も継続的な支援を行うとともに、生活場面での応用（般化）や自分の思いを適切な形で伝えることが難しいことに対する取り組みも行っていく。